

# 読者のページ

## 広報って何だっけ？

磯子区 高家淳子

広報紙を読んだこともなかった私が横浜市に入り、広報を担当して丸三年になる。以来、驚くほど好奇心が旺盛になった。

とにかく、自分の五感と足で稼いだ情報が頼りの仕事。新聞・テレビはもちろん、ミニコミ、スーパリーのチラシ、マンガ、果ては女性週刊誌まで、身の回りのあらゆるものが、何らかのヒントや参考になる。それでも、より市民に親しまれる、より身近な広報紙をいとなると、一人のアンテナやアイデアでは限界があるなあ、と感じるこのごろ、地方の小さな自治体の広報紙が、とても気になる。

広報紙を開くと「おめでどう

ございます♡」とばかりに、目に飛び込んでくる、新生児と新婚カップルの氏名一覧。縁あって、京都の山城町と毎月交換している、この広報紙は月二回の発行で、このほかスポーツ大会の紙上成績発表など、いかにも新鮮で身近な話題がいっぱいである。編集技術はともかくとして、ハタから見ると、なんともつまらないのだが、住民にしてみれば、結構ワクワクとするに違いない。行政への橋渡しとともに、広報が担うもう一つの役割である「地域連携」を、この広報紙は、最も単純な方法で果たしている。

これは、小さな自治体での一つの例だ。けれど、こんなふうには新鮮で、身近な情報を届けるのに、横浜はちょっと大きくなりすぎてしまったようだ。せっかくの情報や、苦勞した企画も時期をのがせば、気が抜けてしまふ。広範囲の人を対象にすれば味が薄くなる。自治体の規模によって、広報の位置づけも違ってあたりまえだが、ならば、国や県よりも住民に近い横浜市のこと。区を基盤にして、もっ

と充実した住民本位の情報サービスができるんじゃないか。広報紙は誰もが信用する確かな情報網。同じ市民として、これを利用しない手はないと思う。そのためにも、より一層の充実が望まれる。役所が配る「チラシ」にしておくには、もったいない素材なのだ。

## 広報紙は恐ろしい

戸塚区 津久井栄之

広報よこはまの区版作成を担当して二年になります。初めは、「何を書けばいいのか。どう書けばいいのか」と、わからないことばかり。同僚の見様見まねで、指示されたとおりに紙面を埋めることしか頭にありませんでした。

広報よこはまは八ページ立てで、そのうち、七・八面が各区分。八面が特集記事、七面はおしらせ記事を主に掲載します。限られたスペース（これがかなり広く感じますが）の中に、決められた表記に従って紙面を作るのは、慣れるまで時間ががかかります。「何を、だれに、どう伝えるか」ということを考える

ようになったのは半年ぐらいたってからです。区民が知りたいこと、役に立つこと。そして一番重要で、難しいのが知ってもらいたいことは何かを考え、その素材を見つけること。区民という多種多様な人々に対して、理解してもらえような身近な話題を簡潔、明快に伝えること。

こういったことを考えるようになって、初めて、自分がどういうふうに住事をすれば良いかわかってきました。

「何を、だれに」のための素材集めに、アンテナを伸ばし、チャンネルを広げます。情報過多ぐらいでちょうど良いと思います。そして、それをできるだけシンプルにするために、不必要なものをどんどん捨てる。残ったものが、必要にして十分なものです。後は、その素材を基に構成すればOK。でも、このO

## △あとかき▽

情報化社会といわれて久しいが、知りたい情報が手に入りにくい状態は変わっていない。

Kはなかなかでません。文章の表現方法、見出し、レイアウト。これは長年の訓練と学習以外に修得することはできないと思います。できあがった紙面を見ると不満な所が必ずあります。

他の担当者が言ったことですが、「自分の文章が何万人の人に読まれるかと思うと恐ろしい」。この気持ち良くわかります。しかし、アイデア、取材、原稿作成、編集―広報紙づくりは企画から完成まで、すべて任せてもらえるやりがいのある仕事です。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等題材は自由。七〇〇字以内。

情報をもとに、地域情報、行政情報、行政の果たす役割や課題等、総合的な「広報力」という問題を考えてみた。△加藤▽